

令和5年度 岩手県農業研究センター試験研究成果書

普及	日本麵用小麦品種「ナンブキラリ」の栽培法と目標生育量
【要約】日本麵用小麦品種「ナンブキラリ」の栽培において、目標収量は600kg/10aとし、播種量は6～8kg/10a、追肥は窒素成分で融雪期に4kg/10aを施用する。	

1 背景とねらい

令和4年度に奨励品種に採用した日本麵用小麦品種「ナンブキラリ」は、縞萎縮病に強く多収・良質で、製麵適性に優れる。

この特性を活かし、早急な定着・普及を図るため、「ナンブキラリ」の目標生育量及び栽培法について明らかにする。

【令和5年度要望「新たに奨励品種になった「ナンブキラリ」の品質分析ランク区分が「A」となる栽培法について」（全農岩手県本部）】

2 内容

(1) 目標収量・生育量（図1、2、3、4、5）

倒伏の発生や容積重の低下を考慮し、目標収量（坪刈り）は600kg/10aとする。その場合の各生育量は、穂数330～400本/m²、減数分裂期茎数400～550本/m²、越冬後茎数900～1,200本/m²である。

(2) 播種量は条播で6～8kg/10aとする（図6）。

(3) 融雪期追肥量は、窒素成分で4kg/10aとする。減数分裂期追肥は、目標減数分裂期茎数の範囲内である場合、原粒タンパク質含有率を考慮し、実施しない。（図7、8）。

(4) 刈取時期が10日以上遅延すると、容積重が低下するため、適期刈取に努める（図9）。

3 活用方法等

(1) 適用地帯又は対象者等 県内全域 「ナンブキラリ」生産者、農業普及員及びJA営農指導員

(2) 期待する活用効果 小麦の生産力及び品質の向上による安定生産・供給
普及見込面積 200ha（令和7年）

4 留意事項

(1) 成果内容は農研センター（北上市：転換畑・黒ボク土）のほ場、播種時期が10月上旬、基肥量が窒素成分5～6kg/10aの条件によるものである。そのため、各地域の気象・ほ場条件に応じて播種時期、播種量、施肥量等を調節すること。

(2) 減数分裂期追肥は、原粒タンパク質含有率を考慮して、実施しないこととしたが、生育量に応じた追肥の要否や追肥量の判断基準については、現在検討中である。

(3) 耐寒雪性は「やや弱」で「ナンブコムギ」より弱いため、雪腐病防除を徹底するとともに、根雪期間の長い地域では作付けをさける。

(4) 赤かび病抵抗性は「中」であるため、「ナンブコムギ」に準じた防除を行う。

5 その他

(1) 関連する試験研究課題

(H19-13) 麦類の奨励品種決定調査 [H26～R6/県単]

(R2-04) 小麦「ナンブキラリ」の高品質安定栽培法 [R2～5/県単]

(2) 参考資料及び文献等

ア (R4-普-03) 縞萎縮病に強く多収で、製麵適性に優れる日本麵用小麦品種「ナンブキラリ」

イ 品種登録出願に関する参考成績書 小麦「東北232号」 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 東北農業研究センター 畑作園芸研究領域 畑作物育種グループ

ウ 畑作物指導指針 平成29年3月 岩手県

6 試験成績の概要（具体的なデータ）

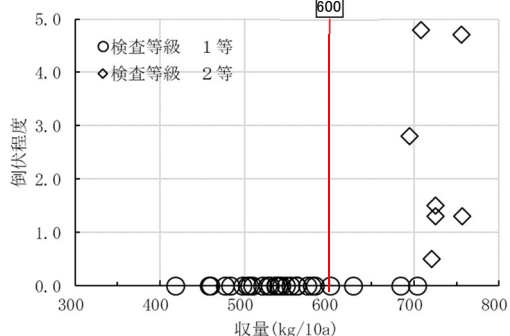


図1 収量と倒伏程度

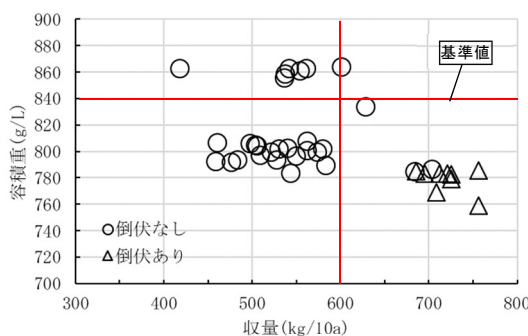


図2 収量と容積重

収量 600 kg/10a を超えると、倒伏の発生が多く、外観品質（検査等級）が低下し、また、粒の充実が劣り、容積重が基準値を下回る。

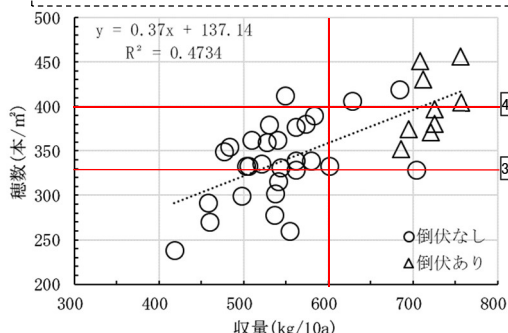


図3 収量と穂数

穂数は 330～400 本/m² を目標とする。

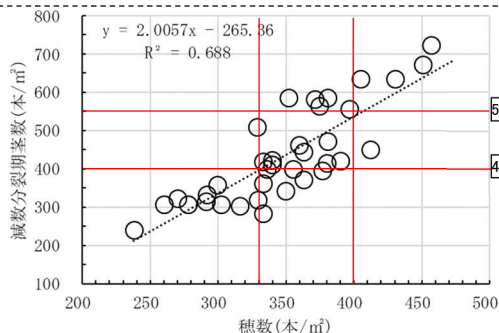


図4 穂数と減数分裂期茎数

減数分裂期茎数は 400～550 本/m² を目標とする。

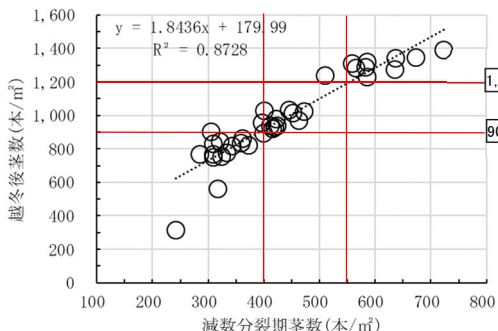


図5 減数分裂期茎数と越冬後茎数

越冬後茎数は 900～1,200 本/m² を目標とする。

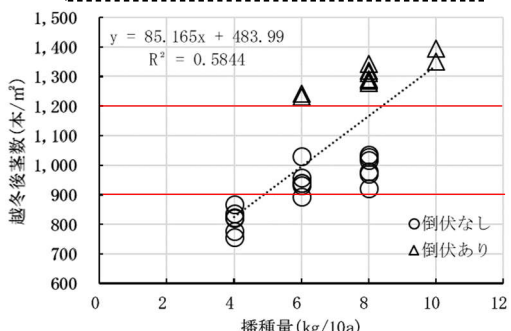


図6 播種量と越冬後茎数

播種量は条播で 6～8 kg/10a を目安とする。

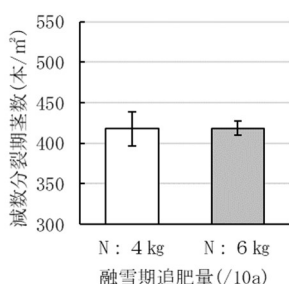


図7 融雪期追肥量と減数分裂期茎数

融雪期追肥量が窒素成分 4 kg/10a と 6 kg/10a では、減数分裂期茎数の差は見られない。
※1 目標越冬後茎数の範囲内での比較。
※2 t 検定で有意差なし ($p < 0.05$)。

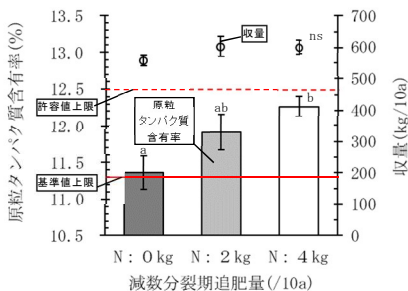


図8 減数分裂期追肥量と原粒タンパク質含有率

減数分裂期追肥量を窒素成分 2 kg/10a、4 kg/10a とすると、原粒タンパク質含有率は基準値上限を超過する。
※1 目標減数分裂期茎数の範囲内での比較。
※2 異なる英字間で有意差あり。ns は有意差なし (Tukey-Kramer 法、 $p < 0.05$)。

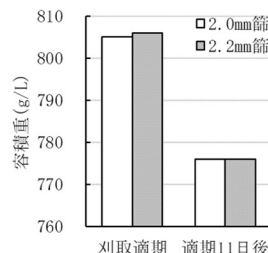


図9 刈遅れによる容積重への影響

刈り遅れると、容積重が低下する。
※融雪期追肥として、窒素成分 4 kg/10a を施用。

(各図共通備考) 図1～6: H26～R5年産、北上
図7～8: R3～R5年産、北上
図9: R5年産、北上
収量は、2.0 mm篩により調整
エラーバーは標準誤差

【担当】 ○生産基盤研究部 水田利用研究室、県北農業研究所 作物研究室